



Title	浅見綱斎『楚辞師説』初探
Author(s)	矢羽野, 隆男
Citation	中国研究集刊. 2023, 69, p. 119-138
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90863
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

浅見綱斎『楚辞師説』初探

矢羽野 隆男

序 論

崎門学派において、佐藤直方、三宅尚斎とともに崎門の三傑と称せられた浅見綱斎（一六五二—一七一）は、直方が朱子学の「理」の超越性・普遍性・規範性を重視したのに対し（注¹）、日常生活における道理の実践を強調した（注²）。また綱斎は、師の闇斎が君臣関係を絶対視したのを継承し、主君に対する臣下の絶対的な忠義を重視した（注³）。ただし、朱子学の修養方法の二本柱である「居敬」と「格物」のうち、闇斎学派がとかく「居敬」に偏りがちだったのに対し、綱斎は「格物」、特に「物」の字を重視した（注⁴）。君臣の大義に対する師闇斎の考えを遺憾なく世に知らしめたと綱斎が自負する主著『靖献遺言』も（注⁵）、本稿が考察の対象とする『楚辞師説』も、その執筆意図は綱斎が重視する「格物」による君臣の義（特に臣下の忠義）の解明と宣揚であった。

綱斎の『楚辞師説』は、近世日本における『楚辞』の数少ない注釈の一つである（注⁶）。本書はもと綱斎が朱熹の『楚辞集注』（以下『集注』と略称）

を講義した記録だが、写本の形で広まり、また明治四十四年（一九一一）に、早稲田大学出版部から「先哲遺著 漢籍国字解全書」第十七卷『楚辞』として刊行され普及した。にもかかわらず、『楚辞師説』はこれまでほとんど『楚辞』研究の対象とならなかった（注⁷）。本稿は、綱斎が重視する学問方法である「格物」説を軸に、『靖献遺言』と『楚辞師説』との関連を考察するとともに、従来注目されていなかった、朱熹の境遇・心情の解明という『楚辞師説』の特徴の一端を明らかにするものである。

一 『靖献遺言』『楚辞師説』と「格物」説と

1 『靖献遺言』と「格物」説と

綱斎は貞享四年（一六八七）三十六歳の時、臣下の忠義を宣揚する目的で、楚の屈原（以下「屈原」）から明の方孝孺まで中国の忠臣八名の「事歴」と「遺言」とを編集して『靖献遺言』（以下『遺言』と略称）を刊行した。綱斎の主著といえるこの書は、綱斎門下で繰り返し講義され、世にも広く行われた。

事歴・遺言から成る『遺言』の構成は、具体的な忠臣の言行（君臣という「物」）を通して直接的に君臣の義理を体得することを狙ったものであった。「靖献遺言目録講義」で、綱齋は『遺言』講義の開講に際し、『遺言』編述の意図を次のように語っている。

蓋空言ヲ以テ義理ヲ説クハ、實ニ其事歴ヲ舉テ閱スルノ尤親切ニシテ、感發興起餘リアルニシカズ。其事ヲ舉テ閱スルハ固ヨリ切也。然ルニ其將絶^{みずから}自鳴ノ言ニ至テハ、又忠臣義士平生ノ蘊所^{うんしよ}、肺肝心腸ヨリ流出シテ、聲氣ニ見ハルモノナレバ、眞ニ風采心志實ニ見ハレテ、マノアタリ接スルガ如クナル者、於レ是可^レ得事ナリ。因テ敬^{つしみ}テ其遺言ヲ表シテ各篇ノ骨子トス。其ウヘニ夫ノ事歴ノ的切ニシテ感發スベキ者ハ採テ其前ニ録シ、讀者ヲシテ并考テ、千載ノ下萬里ノ遠キモ、今日吾心ノ向フ所彼此ノヘダテナカラシメント欲ス。（中略）故ニ此編特ニ士タル者ヲシテ大義ノ端的ヲ知テ切磨シ、學ニアラザレバ一步モ其身ヲ動カスベカラズ、君ニ事ヘ己ヲ處スル、皆幸ニアラザレバ妄ナル事ヲ識テ疑ナカラシメントス。以^レ此武士ノ小學トスルモ亦可也。竊ニ朱子小學稽古篇明^ニ君臣之義^ヲノ遺意ニ附スト云^レ爾。（『靖献遺言目録講義』（注8））

『遺言』各篇に事歴を掲げたのは、「空言ヲ以テ義理ヲ説クハ、實ニ其事歴ヲ舉テ閱スルノ尤親切ニシテ、感發興起餘リアルニシカズ」（注9）、言葉だけの義理の説明よりも、事実行為の提示の方が読者に切実に感激奮起をもたらすからである。また、忠臣の「將絶^{みずから}自鳴ノ言（今際^{いまわ}の際に発する言葉、遺言）」を掲げたのは、忠臣義士の平生の真情が口吻と気迫とを伴って表出され、目の当たりにその態度・意気に接するがごとく読者に働きかけるからだ、という。

忠臣義士の末期の言葉と具体的な事歴とから構成される『遺言』の表現と『大學』の「格物」との関係を、綱齋は次のように語る。

頃日、遺言デ云如ク、君臣トイフ物ニテ詮索シテキカス。サアレバ君臣ト云モノデ、尺障子ナリニツキ合セ、ヨセ合セ、ヨミ合セテ、古今ノ君臣ノ故事、節義ノ咄、聖賢ノ説ヒタトヨセ合セ、不審ヲカケ疑ヲツケホシテイクナリデ、我心ニ次第^だニ君臣ノナリガ心ニアキ、（中略）君臣ノ義ガ心ニアク。夫遺言トイフ書ニテ君臣ト云モノヲ吟味スルデ、我心ノ理ニナルデハナイカ。此物ノ一字ガスグニワザゴトノナリジヤトイフ事ガ、只大事ノ旨也。大學ノ學ヲスル者、物ノ字ノ親切ヲ不^レ知、物ナリトイノ事ヲ離レテ、理ヲ窮ムル論ニナル故、様々空論異説ヲ云テ、トデモナウナルハ、物ノ字ヲ知ラザル故也。（『筭録』上（注10））

『大學』の学問方法では、「格物（物に格^{いた}る）」において「物ナリトイノ（イフ）事ヲ離レテ、理ヲ窮ムル論ニナル故」、すなわち事物を離れて理を窮める観念論になるから、空論異説となり收拾がつかなくなる。「遺言トイフ書ニテ君臣ト云モノヲ吟味スルデ、我心ノ理ニナル」、「遺言」に記した忠臣の事歴・遺言に基づき、観念ではなく君臣という「物・モノ」「ワザゴト」に即して詮索・吟味することで我が心の理となる、という。これによれば、『遺言』は、君臣という「物」を探究して君臣の義を心得る、実に「格物」による学びの書といえよう。

さらに、『遺言』編纂の意図に関しては、先の綱齋の『遺言』開講の言葉に、「以^レ此武士ノ小學トスルモ亦可也。竊ニ朱子小學稽古篇明^ニ君臣之義^ヲノ遺意ニ附ス」とあった。「武士ノ小學」とは、武士が少年期に学ぶ修身教科書の意ではない。儒教的教養人の育成を目的に朱熹が学習効果を考えて

『小学』を編纂した意図に沿い、武士が君臣の大義を効果的に学べるように綱齋が編述した書、それが『遺言』だ、との意である。

この「朱子小學稽古篇明「君臣之義」ノ遺意」についても説明を要する(注11)。朱熹の『小学』は内外二篇から成り、内篇は漢以前の儒教の経伝や人物に基づく儒教倫理の概論であり、「立教」「明倫」「敬身」「稽古」の四篇から成る。いっぽう外篇は漢代以降の人物の言行により内篇の所説を実証したもので、「嘉言」「善行」の二篇から成る。内篇各篇の内容を示すと、立教篇は儒教の教えの本質と重要性、明倫篇は儒教が五倫(父子・君臣・夫婦・長幼・朋友)の教えであること、敬身篇は儒教倫理の実践は日常の主一無適(心の集中専一の維持)の修養、すなわち「居敬」に他ならないことを説く。そして綱齋が『遺言』の祖型とした稽古篇は、上記三篇に説く原理の実践可能性を古人の言語・行為によって実証し、学ぶ者を感奮興起に導くものであった。朱熹は稽古篇の冒頭に当篇の趣旨を、「往行を撫^{なぐさ}ひ、前言を實にして、此の篇を述べ、読者をして興起する所有らしむ(撫往行、實前言、述此篇、使讀者有所興起)」と記す。

この稽古篇には、父子・君臣・夫婦・長幼・朋友の五倫に関する言行が収録される。ただ、明倫篇ではその内訳が「父子之親」「君臣之義」「夫婦之別」「長幼之序」「朋友之交」の標題によつて区分されるが、稽古篇にはそのような標題による整理はない。しかし、父子・君臣などの人倫関係で言行がまとめられる。例えば君臣の関係で収録されるのが、暴虐な紂王に仕えた箕子・比干・微子(孔子の所謂「三仁」)、武王の放伐を諫め隠棲して餓死した伯夷・叔斉、人目のない闇夜にも主君への礼を怠らなかつた蘧伯玉、主君の仇討ちを果たした子讓・王孫賈ら計八名の事歴である。人数が『遺言』と同じ八名なのは偶然であろうが、『遺言』も『小学』稽古篇ともに忠臣の言行という具体的な「物」に即して「君臣之義」(君臣倫理)を体得する

点で共通する。朱熹『小学』稽古篇の遺意に沿った綱齋の『遺言』編纂意図とは、「格物」の方法による君臣倫理の体認といえよう。

2 綱齋の「格物」説

『大学』の「格物」説は綱齋の学問の特色とされる(注12)。綱齋は朱熹『大学章句』の講義において、「格物ガ『大学』ノ一ノ大事」であることを次のように述べる。

「致知在格物」ガニツデナイ、致知トツマツテ格物ハ知ノキハメ様ヲ云ゾ。吾ガ心デ観存して知識ガミカカフトシテハユカヌ。ソレハ釈氏ガ坐禅シテ子リ出ソフトスル様ナモノデ、本来無一物ヲ子リ出ソフトヤラ、虚無寂滅ヲ子リ出ソフトヤラシレス。又何コトナフ明白端的ニ義理ハ天下ノ事物ニ有。(中略)忠孝ノ道理ヲ知タケレバ父子君臣ト云モノデギンミセ子バナラス。心デ觀念シテハ百シテモ何ニモ出ヌゾ。(中略)格ハヒタトセンギヲホシ、事物ニモツテ居ル義理ヲ究メニクテ、カフヨリ外ニナイト云マデニツメルコト。君臣ノ道理ハ君臣ト云物、父子ノ道理ハ父子ト云物デ究メル。大学ノ始ノ教、格物致知力最初ノフミ出シ、コノ義理ガチガヘバ、ユクトシテチカハヌハナイ。(中略)物ヲハナレテハ面々ノ知識ダケノコト。齊家・治国・平天下マテ義理ノギンミカラユエ、コノガ違ヘバドノ様ニナラフヤラシレヌユエ、念ヲ入レテ「致知在格物」ト云ゾ。「格物」ガ大学ノ一ノ大事ゾ。(『綱齋先生大学講義』(注13))

学問の目的・方法を説く『大学』で最も重要な「格物」とは、「格ハヒタトセンギヲホシ、事物ニモツテ居ル義理ヲ究メニクテ、カフヨリ外ニナイ

ト云マデニツメルコト」、事物にある義理を徹底的に詮議（究明）すること
で、「致知トツマツテ（致知と密に結びついて）」知を究明することである。
「格物致知」が『大学』八条目の冒頭「大学ノ始ノ教」「最初ノフミ出シ」
であり、「格物」による義理の究明が肝心という。

「格物」で留意すべきは、「吾ガ心デ観存（心で観念的に把握）」するの
ではなく、「物（あるいは「事物」「モノ）」に即して道理を究めること
である。「物」とは「形ノ立タモノハナシデアレ物」（『同前』六九葉表）
というように、具体的な外形を具えた対象で、「大デイヘバ天地日月星辰、
人デハ父子君臣夫婦長幼朋友マデガ物。小デイヘバ一木一石マデガ物ゾ」
（『同前』同葉）というように、人において君臣の道理（忠）は君臣という
具体的な「物」に即して、父子の道理（孝）は父子という「物」に即して究
明しなければならぬ。反対に「物ヲハナレテハ面々ノ知識ダケノコト」と
なり、「ソレハ釈氏ガ坐禅シテ子リ出ソフトスル様ナモノ」、無をひねり出
そうとするものと批判する。

逆に言えば、「物」に即して道理を究明し尽くせば、事物の知識が広くな
り、道理がおのずと明らかになるという。

吾心ニシル処ハ、天下ノ事物ニ有テ、事物ニ即テセンギスレバ、格物ノ
功ヲツムホド知識ガヒロマリクスルソ。コノ致知格物ガ誠意トモ正心
トモナリ、推テ治国平天下トナルモ、義理ヲアケルカラノコト。朱子ノ
一生力ヲ用ヒタトアル、イツレト云ナガラ、格物ノ字義ヲ如形大切ニ
セラレタゾ。聖賢ノ聖賢タル処ハ、実物ニ即テセンギスルヨリナイ。異
端ヲ実ナイト云ハ、物ヲハナレテノセンギソ。誠意以下皆物ヲ離レヌ。
物ノ字ガ貫テアルコト。（『同前』（注14））

この「事物」に即した「致知格物」の方法によって究明した「義理」を基に、
「誠意」「正心」さらには「治国・平天下」へと展開していく。朱子が生涯
の精力を注いだのもこのような「格物」であつたとし、「実物」に即して「物
ノ字ガ貫テアル」ことの重要性を強調する。

では「事物」に即した「格物」から展開される「誠意」「正心」を、綱齋
はどのように捉えていたのか。まず「誠意」について、次のように述べる。

思ハクノ通ウラヲモテナフ表裡打ヌキノ真味ニナレト云ヲ誠トハ云。

此意ヲヨイ意ノワルイ意ノト云タガルガワルイ。ワルイ意ト云ハアヤ
マリ。（中略）意モ悪イ意ヲ誠ニスルデナイ。アリ様有体マギレヌ様ニ
善ハ善、悪ハ悪ト我ニ覚ノ有通、ミジンキミワルイコトノナイ様ニ、打
チヌキニナレト云コトヲ誠意ト云。（『同前』（注15））

自身の思うまま表裏なく「打ヌキノ真味」、有りのままの真実になることを
「誠」という。これは、「悪イ意ヲ誠ニスルデナ」く、「有体マギレヌ様ニ」
有りのまま明らかなように、「我ニ覚ノ有通」自身の認識の通りに、「ミジ
ンキミワルイコトノナイ様ニ」少しも後ろめたくないようにすることが「誠
意」だという。「誠意」に対して朱熹が「善を為し以て其の悪を去るを知れ
ば、則ち当に実に其の力を用ひて其の自ら欺くを禁止すべし」（『大学章句』
伝六章注）と注して〈悪の除去・自己欺瞞の禁止〉を説くのと比較すると、
綱齋の「誠意」は、規範によって悪い意を矯正するのではなく、自身の認識
を偽り飾らず有りのままにすることであり、学ぶ者の主体性・主観性に重点
が置かれているといえよう。

また「正心」について、次のように述べる。

「正」ハ屹度 此心ヲモツノ、リントカマヘテト云様ニヲコジイテ云コトデナイ。心ガユガンダモノユエ正フスルト思フハ大キナアヤマリ。正ハロク正面ナコトヲ云。心ガダ、イロク正面ナモノ。親ト云ト愛シイト云様ニ、親ナリニ愛シイ心ヨリナイガ、親ニ向フナリノロク正面（中略）長度 鏡ノ明カナ、リニ媚嫌美惡ムカフナリニ照スガ鏡ノロク正面^マノナリ。人心モソレ天下ノ千差万別ニ応スルコト、皆此心ニ根ザ、ヌコトナイガ、アハレナコトニハカナシイ心トナリ、不義ナコトニハ惡ム心トナリ、アソコニ凜トノ屹トノ四角四面ニタダスノト云コトナシニ、生ノ俚ナリガ向フナリノロク正面ニナツテアル。ソレガウカノトナル処ヲ合点スベシ。（『同前』（注16））

「正」とは、「屹度 此心ヲモツ（心の緊張をたもつ）」「リントカマヘテ（厳正な心構えで）」「ヲコジイテ（力んで）」という不自然な仕方で「心ガユガンダモノユエ正フスル」歪んだ心に矯正を加える、ということではない。「正ハロク正面ナコトヲ云」（「ロク」は物が歪まず真つ直ぐなこと）、すなわち「正」とは、有りのままに現すことである。ちょうど鏡が人の美醜を有りのままに映し出すように、親に対しては愛しい心、哀れなことには悲しい心というように、「生ノ俚ナリガ向フナリノロク正面ニ」有りのまま真つ直ぐ向き合うように気を付けることが「正心」だという。「正心」に対して朱熹が「欲動き情勝ちて、其の用の行ふ所、或いは其の正を失はざる能はず。（中略）是を以て君子は必ず此を察して敬しみて以て之を直くす」（『大学章句』伝七章注）と注して〈情欲の矯正〉を説くのに比較すると、綱齋の「正心」は、「誠意」と同様、外的基準による矯正ではなく、物事に向き合えば自然に生じる、有りのままの素直な心情の発現に重点がある。

具体的な事物に即して体認した義理を有りのまま素直に発現するという、

学ぶ者の主体性・主観性の重視こそ綱齋の学問の特色である。これは身分や立場という外的条件よりも内なる心情を重視する綱齋の屈原観や臣下観の底流をなす特徴的思惟といえる（注17）。

3 『楚辞師説』と『靖献遺言』と

綱齋にとつて屈原の『楚辞』は、具体的な「物」を通して直接に忠義の心を学べる点で、朱熹『小学』稽古篇「君臣之義」および綱齋『靖献遺言』と同一線上にある著作だといえる。

この書（引用者注…『楚辞』）を読むものは、君に忠すると云ふことを、よくく知るべし。勿論聖人の忠を説くに、足らぬと云ふことはなければ此書ぞ。（中略）詩の體は變じて、情の切なることは、三百篇に恥ぢぬぞ。朱子の註を読むものも、さう思うて讀むべし。屈原が博學なもののゆゑ、いろいろ吟味のあることあり。朱子の大博識で吟味して註せられたことゆゑ、文章の爲にも、格物の爲にも、善いぞ。三體詩などを讀むやうなことではない。本方の詩を讀むことと合點すべし。（『楚辞師説』「楚辞集注総釈」（注18））

『楚辞』を読むこと、特に朱熹の注釈を通して『楚辞』を読むことは「格物の爲にも善い」という。『楚辞』は、「直に我身にうけて、眞實に、忠愛自然の本心の離れられぬを知るは此書」というように、屈原の行為・心情の表現を通して、已むに已まれぬ忠君愛国の心情を身を以て体認するのに格好の書である。

風景を語るなりで、臣子の君父に離るゝ情を見るべし。斯様な處が、楚辭の讀みやうぞ。（中略）義理の深いことは、文章で語りたがよし。詩に止まれぬ情を歌ふぞ。（『楚辭師說』「九歌」「湘君」（注19））

特に、心情表現を本質とする詩歌の形式によつて臣下の至情・忠心を伝えるところが『楚辭』の価値であり、この点で『楚辭』は『詩』三百篇に匹敵する準經書とされるのであつた。

さらに、綱齋の『靖獻遺言』と朱熹の注した『楚辭』すなわち『楚辭集注』とは、共通の屈原觀に貫かれている。例えば、『遺言』卷一には屈原の略伝および「懷沙賦（乱辭部分）」「漁父辭」が収録される。この構成自体は『史記』屈原列伝を参考にしたと見られる。しかし、屈原の略伝は『集注』の朱熹「離騷」序に記す略伝に基づき、「懷沙賦」「漁父辭」の本文も全く朱熹『集注』に依拠している。また『遺言』は、屈原を理解する参考として、朱熹『集注』序の一部「原之為人」以詞人之賦視之也」を付録し、そこに記す「屈原の「忠君愛國の誠心」「（續）離騷、自から已む能はざるの至意」が『楚辭』を生んだ」とする朱熹の屈原像を明示している。いっぽう『史記』屈原列伝の一部を引用して屈原の正直・忠・智を示しながら、〈屈原は怨みにより離騷（楚辭）を著わした〉という司馬遷の屈原觀は否定する（朱熹・司馬遷の屈原觀については後述）。このように綱齋は、『靖獻遺言』卷一所収の屈原に関する記述において、朱熹『集注』を拠り所とし、〈讒言を受け追放されても一途に主君・祖国を思う忠臣＝屈原〉という朱熹の屈原觀を受け継いだ。

綱齋は、崎門派の学者として朱熹の著述を精読し、また主君に対する臣下の忠義を重視した。その当然の帰着として、朱熹が晩年に精力を傾けた『楚辭集注』にも注目した。元禄十四年（一七〇一）五十歳の綱齋は、一年をか

けて朱熹『楚辭集注』を講義し、その綱齋の講義を高弟・若林強齋が筆記した『楚辭師說』は写本の形で広まった。

綱齋はこの『師說』の総論に当たる「楚辭集注総釈」で、「屈原は學もあり、才もあり、文章もよし。千載忠義の一人ぞ。其忠義の心より發せらるゝなりが、かうなる」（注20）と述べ、〈屈原の忠心が『楚辭』を生んだ〉という朱熹の屈原觀を受け継ぐ。そして、朱熹『集注』序の注において『集注』と『遺言』との関係に触れ、

『遺言』を編むにも、これ（屈原の事績・遺言）を第一條に載せるも、此心で無うては、たとひ叛かいでも、叛く心は持つてゐると云ふものぞ。（『楚辭師說』（注21））

綱齋が『遺言』巻頭に屈原の事跡と『楚辭』の一節とを掲載したのも、そこに朱熹の強調する忠心の本質が見て取れるからだという。とすれば、朱熹『集注』に基づいて屈原『楚辭』の忠心を解き明かす綱齋の『楚辭師說』は、朱熹に依拠して君臣の大義を宣揚した『靖獻遺言』の延長線上に成立した著述ということになる。換言すれば、忠臣の理想を示す『靖獻遺言』の原点である屈原『楚辭』に向き合い、朱熹『集注』の手引きによつて屈原の行動・心情を読み解いた書が『楚辭師說』である、といえよう。

因みに、師綱齋の『楚辭』尊重を受け継いだ若林強齋も、享保二年（一七一七）から同六年（一七二二）にかけて『楚辭』を講義し、師同様に朱熹『集注』序の「（續）離騷」の四字を重視した。

此四字ガ忠臣ノ心ノ眞味ヲ知ル處ゾ。楚辭ヲヨミテ屈原ノ屈原タル處ヲ見ルカネハコ、ニアルゾ。（中略）綱齋先生ノ靖獻遺言ノ第一ニコレ

(四字を含む朱熹『集注』序) ヲノセラル、モ、コレガ忠義ノ骨髓デ
(中略) 此心ヲ得ルデナケレバ、忠ノ字ノハナシハナラヌゾ。(『楚辞
講義』(注22))

朱熹のいう「縫綖惻怛」の心情が屈原『楚辞』の本質であり、だからこそ綱
斎は忠義宣揚の書『靖献遺言』巻頭に朱熹『集注』序を収載したのだという。
朱熹の屈原観を受け継いで屈原『楚辞』と『靖献遺言』とを深く関連づけた
綱斎の意図を、強斎は指摘するのである(注23)。

このように、綱斎『楚辞師説』は、〈忠心を学ぶ「格物」の書および朱熹
の屈原観の継承〉という共通性によつて『靖献遺言』と密接に関係し、屈原
『楚辞』に対する綱斎の見方が詳細に窺える重要な著述である。

二 屈原・朱熹の二重写しの心情の解明

綱斎『楚辞師説』は、『楚辞』の文意や屈原ら作者の寓意・心情を解き明
かす『楚辞』の注釈であるが(注24)、あくまで朱熹『楚辞集注』に基づく注釈
である。ただし、綱斎『師説』における朱熹『集注』は、単に『楚辞』を解
釈する手引きという意味を超え、朱熹の『集注』執筆当時の状況やその心情
自体にも関心が向けられる。本章では、綱斎『師説』がいかにそれに着目し
丹念に解釈していたかを考察する。

1 朱熹の屈原観の継承・宣揚

朱熹『集注』の屈原観の考察に先立ち、朱熹以前の屈原観の形成に重要な
役割を果たした司馬遷(前一四五―前八六)の屈原観を確認しておく。

屈原の最古のまとまった伝記は司馬遷の『史記』「屈原賈生列伝」である。

これにより、屈原と『楚辞』所収の「離騷」とが、作者とその作品として初
めて明確に結びつけられた(注25)。司馬遷は屈原の「離騷」制作の動機をこ
う述べる。

屈平王の聴の聡ならず、讒諂の明を蔽ひ、邪曲の公を害し、方正の
容れられざるを疾む。故に憂愁幽思して離騷を作る。離騷は、猶ほ離憂
のごとし。(中略) 屈平は道を正しくし行を直くし、忠を竭くし智を尽
くして、以て其の君に事へ、讒人之を間つ。窮すと謂ふべし。信にして
疑はれ、忠にして謗らる。能く怨むこと無からんや。屈平の離騷を作
るは、蓋し怨みより生ずるなり。(屈平疾王聴之不聰也、讒諂之蔽明也、
邪曲之害公也、方正之不容也。故憂愁幽思而作離騷。離騷者、猶離憂也。
(中略) 屈平正道直行、竭忠盡智以事其君、讒人間之。可謂窮矣。信而
見疑、忠而被謗。能無怨乎。屈平之作離騷、蓋自怨生也。)(『史記』
「屈原賈生列伝」(注26))

司馬遷は「離騷」を、君主への忠諫が聞き入れられなかった屈原の「怨みよ
り生ずる」文学と見なした。これは、司馬遷自身の悲運・不遇と屈原のそれ
とを重ね合わせた、いわゆる「発憤著書」説である。これにより司馬遷以後
の屈原観や『楚辞』解釈は、屈原の悲運・不遇と結びつけられ(注27)、「離
騷」および『楚辞』理解の基本線となった(注28)。

しかし朱熹は、司馬遷のように「離騷」を主君への怨みから生まれたとは
せず、〈屈原は主君を思慕するのみで怨みはなかった〉と強調した(注29)。
朱熹『集注』序に言う。

原の人と為り、其の志行 或いは中庸を過ぎて以て法と為すべからずと

雖も、然れども皆忠君愛国の誠心より出づ。原の書たる、其の辞旨或いは跌宕・怪神・怨懟・激發に流れて以て訓^わへと為すべからずと雖も、然れども皆纏綿惻怛、自ら已む能はざるの至意より生ず。(原之為人、其志行雖或過於中庸而不可以爲法、然皆出於忠君愛國之誠心。原之爲書、其辭旨雖或流於跌宕怪神怨懟激發而不可以爲訓、然皆生於纏綿惻怛、不能自己之至意。(『楚辭集注』序(注30))

朱熹から見れば、「離騷」は屈原の「忠君愛国の誠心」「纏綿惻怛、自ら已む能はざるの至意」、すなわち一途に主君を思い傷み悲しみ痛む、已^やむに已まれぬ忠君愛国の誠心・至意から生まれた作品であり、『楚辭』はこの屈原の心意を宗とする書であつた。

綱齋『楚辭師說』は、この朱熹の抱く屈原觀を受け継いで宣揚する。『師說』中の数多の事例から数例を示す。

まず『楚辭集注』全編に対する綱齋の総説に当たる「楚辭集註総釈」の記述である。綱齋は、漢唐以来の文人は『楚辭』所載の好色・仙術の描写を事実と受け取るが、それは屈原の真意を知らぬ誤解だとして次のように記す。

屈原が、君の事を直に指さう様はなし。好色に托しては、君を餘義なう慕う情を發し、仙術に托しては、長生して成り行く末を見たいと云ひ、何とぞして君の耳へも入れたらば、御目もあかうかと云ふの、忠心徹底の旨ある事を知らぬぞ。(中略)皆人の、君に叛くの國がつぶれてから裏^{ウラガ}反るのと云ふは、つゞまる處、どうも君の離れられぬと云ふの本心、忍びぬ惻怛の心がないゆゑ、たゞつひ結んだ合體^{ウツカ}(点)の様に思ふゆゑぞ。此書全體は、忠の吟味が眼「目」ぞ。(『楚辭師說』「楚辭集注総

釈」(注31))

すなわち、『楚辭』には屈原の「忠心徹底の旨」が託されており、「忠の吟味」が『楚辭』全体の眼目という。

また朱熹『集注』序に対する綱齋の注は次のように述べる。

「纏綿」は、解いても解いても解けぬ様に、むすばゝれたことを云ふ。こゝが忠臣の心、楚辭の値^チ(カ子)ぞ。(中略)何と忘れうとしても忘れられず、解かうとしても解かれぬ、宛も^カ長^チ度^チ棄てられた女房の、夫のことが離れられぬと云ふ様に^ナ、結んだ思ひが^ヲ、解いても解いても解かれぬ、これが至親至切至極の本心ぞ。此意から出たものぞ。(『楚辭師說』「楚辭集注目錄並序」「纏綿惻怛」注(注32))

朱熹のいう「纏綿」の情を、綱齋は『楚辭』の「値」「カネ」と指摘する。

「値」は「価値・値打ち」の意、「カネ」は「矩・曲尺」から「基準」の意で、ここでは『楚辭』理解の要点・眼目の意と考えられる。

また屈原「離騷」の乱辞「已んぬるかなく吾將に彭咸の居る所に從はん(已矣哉く吾將從彭咸之所居)」の綱齋注に言う。

つゞまる處の本意を云うて、楚國の忘れられぬ本心を云はれて、「已矣」は、「さらば」と云うて、本國をみれば、用ひられず暗いぞ。(中略)都へ歸りて見ても、人が無ければ用ひず、諸國を廻りても、他の君へ事ふる心でなし、我身の處する處は、身を投げて死して、忠臣の情は千載同じことゆゑ、「彭咸の居る處に從はう」となり。何うも堪えへられず、楚國の亡びるを見るに忍びぬと云うて死なれたぞ。忠義の心は餘義無けれども、大過なゆゑ、「朱熹『集注』序に」「中庸に過ぎた」ともあ

るぞ。されども、忠義の心は此處で見えたぞ。(中略) 屈原は、あまりの切なゆゑのことぞ。聖人から云へば、法りに過ぎたれども、本心から見れば、餘義ない繾綣の心ぞ。(『楚辞師説』「離騷」乱辞注(注33))

朱熹『集注』序の文言「中庸に過ぎ」を踏みつつ、屈原の「忠義の心」「繾綣の心」が切なる表現であることが強調されている。

また「離騷」以外の作品でも、例えば「九歌」「湘君」の、湘君を探し求めて会えず、それでもなお愛慕の心が已まず、身に帯びた袂佩を解いて湘君に贈るという場面、その注に次のように言う。

これでおきたけれども、如何にしても、繾綣惻怛して、止まれぬゆゑ、直に達しては、手にも取られまい程に、我が佩や袂を捨て、置いて取らせたとなり。(中略) 繾綣と君に結ばれて在る心の解けぬが、忠臣の心の至極ぞ。斯様な處を極めて、味はふ筈のことぞ。斯様な處を、朱子の發せられて、數千載埋もれた屈原が心が明になった。(『楚辞師説』「九歌」「湘君」(注34))

朱熹『集注』序の文言「繾綣惻怛」を踏みながら、『楚辞』に込められた忠臣・屈原の心情が、數千年ぶりに、朱熹『集注』によって解明された、と言う。朱熹の屈原觀を全面的に受け入れ宣揚しているのがわかる。

2 『楚辞集注』執筆当時の状況および朱熹の心情の解明

朱熹『楚辞集注』は、屈原の心情と朱熹のそれとが二重写しになった注釈である(注35)。屈原は佞臣の讒言に遭って楚王に追放されても主君への忠義の心を失わなかった。いっぽう朱熹に代表される道学派は、慶元元年(一一

九五)の党禁において韓侂胄一派から「偽学」のレッテルを貼られ、同志が次々に弾圧を受け、朱熹自身も職名・役職を剥奪されて朝廷を追われ、慶元六年(一二〇〇)に死去するまで党禁が解かれることはなかった(注36)。朱熹の最晩年に係る『集注』執筆の背景には、党禁による弾圧・追放という自身の悲運・不遇があった。屈原の心情を解明することは、朱熹にとって、自身の鬱屈した心情を晴らすことでもあった。朱熹を尊崇する綱齋の『師説』は、屈原の心情を明らかにするとともに、『集注』に込められた朱熹の心情を解明するものでもあった。以下その例証を挙げる。

前述のように、朱熹は『集注』序で、『楚辞』は屈原の已むに已まれぬ繾綣惻怛の忠愛の心意から生まれた、と明言した。続けて朱熹は、自身に至る『楚辞』解釈の歴史を振り返る。屈原の真意は、早くも漢代の司馬遷や劉安・班固・賈逵らに伝わらず、また隋唐期に成った數種の注釈も散逸して是非を知る術がない、という。そして、世に流布する王逸『楚辞章句』(以下『章句』)・洪興祖『楚辞補注』(以下『補注』)は、ともに訓詁・名物(博物学)には詳細であるとその意義を評価しながらも、「其の大義」(『楚辞』の本質的な意義)に関しては価値を認めない。

其の大義に至りては、則ち又た皆未だ嘗て沈潜反復し、嗟歎咏歌して、以て其の文詞の指意の出づる所を尋ねず、遽かに喩へを取りて説を立てて、旁く曲証を引きて、以て強ひて其の事の已に然ることに附せんと欲す。是を以て或いは以て迂滯して性情に遠ざかり、或いは以て迫切して義理に害あり、原の為す所壹鬱として当年に申ぶることを得ざる者をして、又た晦昧して後世に見はれ白らかならざらしむ。(至其大義、則又皆未嘗沈潜反復、嗟歎咏歌、以尋其文詞指意之所出、而遽欲取喻立説、旁引曲證、以強附於其事之已然。是以或以迂滯而遠於性情、或

以迫切而害於義理、使原之所為壹鬱而不得申於當年者、又晦昧而不見
白於後世。」（『楚辭集注』序（注37））

王逸『章句』・洪興祖『補注』とも、作品への沈潜熟読によつて表現とそこに込められた意図とを追究することをせず、安易に説を立てて牽強付会な解釈をするため、迂遠で心情から離れ、また解釈が直接的に過ぎて文意が損なわれている。その結果、屈原が生前に抑鬱されて表明できなかったことが、後世に至つても覆い隠されたままである、という。こうして旧注に不満を抱く朱熹は『楚辭集注』の執筆に至つたのである。

朱熹が自著に託した思いは悲壮である。

庶幾くは読者 以て古人を千載の上に見るを得、而して死せる者作るべくんば、又た以て千載の下に我を知る者有るを知りて、來者の聞かざるを恨まざるに足るを。嗚呼、惓惓かな。是れ豈に俗人と言ひ易からんや。（庶幾讀者得以見古人於千載之上、而死者可作、又足以知千載之下有知我者、而不恨於來者之不聞也。嗚呼惓矣、是豈易與俗人言哉。）（『同前』序）

朱熹は『集注』の執筆により、読者を千年前の古人（屈原）に直面させ、もし死者（屈原）が生き返つたら、千年後に自分（屈原）の心を知る者がある^{と知らせ、自分の真意が後世に伝わっていないと無念に思わせないようにしたい、と願う。}ために朱熹は、作品に感情移入して熟読朗詠し、表現とそこに込められた意図とを探究することによって、理解者を得ぬまま死んだ屈原の心意に迫り解明に努めたのである。

いっぽうで朱熹は、慶元の党禁で孤立する自身の鬱屈した心意に共感して

くれる理解者を、屈原と同様、同時代人のうちに見出すことはできなかった。序文末尾の「嗚呼（ああ）惓（かな）しいかな」という悲嘆は、久しく理解者を得なかった屈原への共感であり、現に孤立する自身の境遇への絶望である。千年前の屈原の鬱屈した心意を解き明かす『集注』は、朱熹が自身の遣り場のない思いを将来の理解者に托する書でもあつた（注38）。

綱齋は、この朱熹『集注』の序文に対し、単なる文意の解説の域を超えて、朱熹を代弁するように丁寧に解説する。

千載遠ざかりて、只今（トテモ）屈原の顔を見よう様はないが、此書で屈原の心を得れば、千載の上で面を見知ると云ふもの。萬一死んだ（スル）ものが生きて出ようものならば、吾心の知りてが、千載の下にも有るかと思はるゝで有らうゆゑ、來者が此旨を聞知らぬ（モノガアルカ）と云ふの恨がないであらうとなり。朱子の身に感じて云はるゝぞ。（中略）千載の屈原を、今出さう様はないが、出られたらば、恨み「は」ない、同じ旨ぢやと（云フ知りテヨク／カナフタコトシヤト）思はるゝであらうとなり。どうも、かこたう様はなし。かう云はれたものぞ。此事は（コレガ）忠臣の心ない者とは云はれぬゆゑ（ホド）に、俗人と言易からんやと「云ふ」なり。（『楚辭師說』「楚辭集注目録並序」注（注39））

「屈原は、自分の心意は朱熹の理解と」同じ旨ぢやと（云フ知りテヨク／カナフタコトシヤト）思はるゝであらう」「屈原は朱熹の理解に」かこたう様はなし（不満に思うことはない）」「という文言からは、（朱熹は忠臣屈原の真の理解者であつた）という綱齋の認識が窺える。また「屈原の心意を」朱子の身に感じて云はるゝぞ」「孤独な忠臣屈原に対する朱熹の思いは」忠臣の心ない者とは云はれぬ」には、（朱熹は屈原を自身に重ね合わせ

ていた」という綱斎の理解が見て取れる。

3 『朱子行状』による『楚辞集注』執筆時の状況把握

『楚辞集注』執筆当時の朱熹の状況について、綱斎は『朱子行状』（以下『行状』）によっても把握していた。崎門派の学者の『行状』に対する尊崇は絶大で、綱斎も数度にわたって『行状』を講義し、この書を通じて朱熹の人となりを敬仰した。天和三年（一六八三）十月十九日、四回目の『行状』講義を終えた綱斎は『行状』に次の識語を記した。

吾輩のごとく平日 朱子の学に従事すると称する者、其書を誦し其の徳を仰ぐこと、惟に裘葛芻豢の身に切なるのみならず。而して其の至る所其の守る所、反つて此の書の棄つる所に出づれば、則ち朱子の罪人たること、孰か此より大なる者有らん。而して又何の顔ありて重ねて此の篇を披きて再び其の義を講ぜんや。（中略）夫れ千載の遠き、万里の遙かなる、俯仰慕向の間、精霊は上に在して我に臨む。斯の人敢へて忽忘すべけんや。（若吾輩平日称従吏于朱子之學者、誦其書仰其徳、不惟裘葛芻豢之切于身而已。而其所至其所守、反出于此書之所棄、則為朱子之罪人、孰有大乎此者。而又何顔重披此篇再講其義耶。（中略）夫千載之遠、萬里之遙、俯仰慕向之間、精霊在上臨我。斯人可敢忽忘哉。）（『綱斎先生文集』卷四「読朱子行状」（注40））

朱子学者たる者、日頃から『行状』に親しみ、自身の行為・信条が『行状』に記す朱熹の生き方に違背するならば、この上なき「朱子の罪人」だという。綱斎が、朱熹の思想のみならず、その人格に向き合い、信仰に近い心情を抱いていたことがわかる。また、その高弟の若林強斎も「朱子ノ書ヲヨムニハ、

朱子ノ人トナリヲシラデ叶ハヌコトニテ候」（『雑話』上（注41））という。綱斎一門では『朱子行状』により朱熹の人となりに迫ることが重要であった。では『集注』執筆当時の朱熹の状況を、綱斎はどのように理解していたのか。綱斎には『朱子行状』の講義録『朱子行状師説』がある。冒頭に「朱子行状 退溪李滉輯註」とあるとおり、李滉（退溪 一五〇一—一五七〇）が注した『行状』に基づく講義録である（注42）。ここから『集注』執筆の状況に対する綱斎の理解が窺える。

李滉注は、『楚辞集注』の完成時期を李默・洪嘉植『朱熹年譜』の説に基づき寧宗の慶元元年（乙卯・一一九五）朱熹六十六歳の年とし、朱熹の弟子の楊楫の跋文を引用して朱熹が楊楫らに『楚辞』の注釈を見せる場面を記す。まず慶元元年の李滉注を掲げる。

是の歳 楚辞集註成る。楊楫の跋に云はく、慶元乙卯、楫 先生に考亭精舎に待す。時に朝廷 党人を治むること方に急なり。先生 時を憂うるの意 屢しば色に形はる。一日 学者に出し示すに釈する所の楚辞一篇を以てす。某 退きて之を思ふ。先生平居 学者に教ふるに、首に大学・語・孟・中庸の四書を以てし、次いで六経、又た次いで史伝、秦漢以後の詞章に至りては、特に余論に之に及ぶのみ。乃ち独り楚辞の解釈を為す、其の義 何ぞや。然るに先生終に言はず、某輩も亦た敢へて窃かに請ふこと有らず。（是歳楚辞集註成。楊楫跋云、慶元乙卯、楫侍先生于考亭精舎、時朝廷治黨人方急。先生憂時之意屢形於色。一日出示學者以所釋楚辞一篇。某退而思之。先生平居教學者、首以大學・語・孟・中庸四書、次而六經、又次而史傳、至於秦漢以後詞章、特餘論及之耳。乃獨爲楚辞解釋、其義何也。然先生終不言、某輩亦不敢竊有請焉。）（『朱子行状』慶元元年、李滉注（注43））

この李滉注についてなされた綱齋の講義が下記である。屈原および朱熹の心の壁に分け入るように丁寧に解き明かす様が見て取れるため、長文を厭わず引用する。まず李滉注「是の歳 楚辞集註成る」の解説である。

是歳 楚辭ノ註ガ出來タゾ。此楚辭ノ註ヲナサレタハイカフ旨アツテノコト。追取テイヘハ、此時朱子ノ君ニ事ヘラレテ、讒者ノ爲ニ阻テラレテ罪ヲ蒙リ、何卒ト君ヲ思召シテ、思召シノ通りニコカス、思召ノ通り上ヘ通ゼヌノミカ、却テ禍ヲ被ムラレタ。屈原ノチャウド懷王ニ事ヘラル、ナリガソレゾ。

屈原ハ懷王ト君臣トイヘトモ、血脈ノツバキタ君臣ユヘ、去フトシテ去ラレモセズ、ミス／＼君ノ蔽ハレテイラル、ワミテハイラレズ、屈原ニアリテドウモイヘヌ倦倦惻怛、至誠已ム能ハザルノ忠義、君ヲ思フノ本心ノアラハル、處ガ爰デミヘタモノ。此心カラシテ離騷經ヲ歌ヒ出サレタモノゾ。セメテ離騷經ナリトモ顯ハシテオイタナラバ、此后萬カ一ニモサテ／＼カホドニ屈原ハ君ノコトヲ思テ居タコトカト云テ、君ノ御目ノアカル、コトモアラフカト云ノ、ヤルセナイ心ノヤマレヌカラシテカ、レタモノ。

カウ云コトヲ考ヘテミレハ、今更朱子ノ身ニヒツシリトツマサレテキテ、定メテ屈原ノ懷王ヲ大切ニ思ハル、心モカウシタコトデアロウフトツマサル、ナリニ、朱子ノ心ニ感慨ナサレテ、已ムニヤマレヌ所カラ事體ノヒシト相カナフ所ニ感セラレテ、スグニ離騷經ヲトリテ註ヲナサレタモノゾ。爰力大事ナ旨ゾ。（『朱子行狀師說』慶元元年（注44））

第一段には、『集注』が完成したとされる慶元元年当時、朱熹が讒言によつ

て主君と離間せられ迫害されていたこと、そんな朱熹と屈原との境遇の類似が述べられる。そして次段以下、屈原が「倦倦惻怛、至誠已ム能ハザルノ忠義、君ヲ思フノ本心」を「離騷」に托し、将来の主君の理解と改心に期待したこと、その屈原の状況・心情が「朱子ノ身ニヒツシリトツマサレ」「朱子ノ心ニ感慨ナサレ」「事體（事の状況）ノヒシト相カナフ所ニ感セラレ」たのを契機として朱子が『集注』執筆に及んだ、という状況が詳述される。続けて綱齋は、朱熹と楊楫との対面の場面を解説する。『集注』執筆時の状況・心情に関わる部分を摘録する。

此朱子ノ註ヲナサレタ旨ヲ至極得タ人ハ楊楫ゾ。コレハ朱子ノ門人ゾ。此註解ナサレタ旨ヲ至極知リヌイテノ云分ゾ。「楊楫跋云云治黨人」ト云ハ、此後ニ出テアル朱子ヲ偽學ト云コトヲ云ヒ出シテ、今ノ切支丹ヲ吟味スルヤウニシテ、偽黨ト云テ門人衆ヲウゴキノトレヌヤウニ、宿ノカシテモナイヤウニアツタコトゾ。ソレデ「方急」トアル。（中略）「然先生云々」サレバノコト、先生モ終ニドウ云コトデ註解ヲシタト云コトヲ仰セラレモセズ、拙者或カヤウナモノモドウ云コトデ註ヲサナレタト云コトヲ敢竊ニ御伺イ申タコトモナイトアルノコト。コ、ノ云分ガ、楊楫ノ朱子ノ旨ヲ得ラレタト云ガコ、ノコトゾ。此ワケノ云テナイガ、至極楚辭ノ旨ヲ得タト云モノ。カウ云テアルウチニ、ドウモイヘヌ味ヲモツテイル、感慨ノアルコトゾ。（『同前』同年）

当時の朱熹を取り巻く厳しい環境を、綱齋は「今ノ切支丹ヲ吟味スルヤウニシテ」と日本の状況に置き換えて生々しく想像する。そして、『集注』執筆に込めた思いを言葉にせぬ朱熹と、その沈黙に師の著述の意味を黙識する楊楫と、この師弟の無言の対話に対して綱齋は、「此ワケノ云テナイガ、至極

楚辭ノ旨ヲ得タト云モノ」「ドウモイヘヌ味ヲモツテイル、感慨ノアルコト」として、言葉にならない朱熹の苦衷を汲み取っている。

このように『朱子行状師説』からは、へ『楚辞集注』は屈原の境遇・心意に朱熹が我が身を重ね合わせて著した注釈である」と綱齋が明確に把握していたこと、かつ綱齋が朱熹の深い憂いを理解し共感していたことが読み取れる。

4 『楚辞師説』における朱熹の境遇・心情の解明

綱齋『楚辞師説』の根柢には、屈原のみならず朱熹の境遇や心情に思いを致し、それを明らかにする志向がある。次の『楚辞師説』はその一例である。

朱子は韓侂胄の禍にあうて、何ほど諫を申上げても聞かれぬ〔ワケナフ〕、朱子一人して天下の相手になる様になつた〔ナリ〕、終に韓侂胄は〔ガ〕朱子を偽學と名付けて、道學を潰さうとしたぞ。朱子の諫は用ひられぬ、退いてこの書〔楚辞〕を讀んでみて、〔屈原は〕三代以來の忠臣ぢやに、其時に鬱して上へ達せざるさへ憾みぢやに、此書を讀む者が、忠義の心を知らいで、皆そでないことに、曲げてあるゆゑ、さてよく正直の情の、飽きにくいものぢや、楚王の耳に入らぬさへぢやに、屈原が情の萬世に達せざることを悲う思ひ、主〔屈原〕の身にひつしりと思召し合せて此註をなされたぞ。こゝに於て、屈原忠義の心が再び明になりたるぞ。其思召しは、此様に註をして置いたらば、これを歌うて、もしも萬世、君の心も開かうかと云の、餘義ない、君を歎くの切ない心でなされたぞ。（『楚辞師説』「楚辞集注総釈」（注45））

「三代以來の忠臣」である屈原の「忠義の心」は、屈原と同様に迫害孤立の

境遇にあつた朱熹が「主〔屈原〕の身にひつしりと思召し合せて此註をなされ」た結果、「屈原忠義の心が再び明になりたる」ことを得た、屈原の忠義心は同じ境遇にあつた朱熹だからこそ解明できた、とする（注46）。かつ、朱熹の『集注』執筆の意図は、「此様に註をして置いたらば、これを歌うて、もしも萬世、君の心も開かうかと云の、餘義ない、君を歎くの切ない心でなされた」というように、朱熹自身の忠君愛国の思いが将来の主君に理解されることであつた、と綱齋は理解していた。よつて綱齋は、『集注』に託された朱熹の鬱屈した思いを述べようとする。屈原の心情の解明とともに、朱熹の境遇や心情を解明すること、これが綱齋『師説』の基本姿勢である。

以下、綱齋『師説』が朱熹の境遇・心情に言及する例を挙げる。

まず「離騷」の「〔楚国は乱れて芳草の〕蘭芷變じて芳しからず、荃蕙化して茅と為る〔蘭芷變而不芳兮、荃蕙化而為茅〕」（三〇九・三二〇句）について、朱熹は「芳草が惡草と化してしまったことを言う。この時に死んでも変節しなかつたのは、楚国でただ屈原一人であつた（今日蘭芷不芳、荃蕙為茅、則更與之俱化矣。當是時也、守死而不變者、楚國一人而已、屈子是也）」と注するのみである（注47）。それに対し、綱齋注は、楚の人々の変節に絡めて慶元の党禁当時の朱熹周辺の状況に言及する。

本方の根から芳ひ荃蕙も根から茅になりたぞ。朱子の偽學の禁の時も、弟子の黄勉齋の李燔のと云ふ衆は、守りあり、其餘は朱子の弟子と云へば宿も貸さぬ様になりたゆゑ、朱子の門通りても入らぬ様にありたるぞ。もはや全體總てが臭うなりたゆゑ、只屈原一人計りぞ。（『楚辞師説』「離騷」（注48））

このような例は「離騷」以外にも見出だせる。たとえば、「九章」「惜誦」

の「増弋機^{あやう}」つて上に在り、尉羅張りて下に在り。張辟を設けて以て君を娛しましむ、身を側^{そば}めんと願へども所無し（増弋機而在上兮、尉羅張而在下。設張辟以娛君兮、願側身而無所）」（六九・七二句）について、朱熹は、「邪惡な人はこつそり罌を仕掛けて君主の氣に入らぬ者を中傷して君主のご機嫌を取り、その被害を避けようとも逃げ場がない（讒賊之人、陰設機械、張布開闢、傷害君之所惡、以悅君意、使人憂懼、雖欲側身以避之、而猶恐無其處也）」と注するに過ぎない（注49）。しかし綱齋注は、

屈原がわるいことを、張り辟^{ひら}いて君を喜ばせて、どうも、身を潜めて居らうとしても、居り處ないぞとなり。朱子を晩年に誹りて、そしりさへすればよい身代になると云うて、奇貨と云うたぞ。（『楚辭師說』「九章」「惜誦」（注50））

と、朱熹晩年の容赦なき迫害に言及する。

また「九章」「哀郢」の「曾て知らず夏の丘と為り、孰^{いず}れか兩東門の蕪^あるべきとは（曾不知夏之為丘兮、孰兩東門之可蕪）」（三九・四〇句）について、朱熹は「郢都の宮殿・城門が廢墟と化そうとは懷王は思い及ばなかったが、秦に攻略され楚が陳への東遷を余儀なくされたのは、この僅か数年後のことだった（楚王曾不知都邑宮殿之夏屋當爲丘墟。又不知兩東門亦先王所設以守國者、豈可使之至於蕪廢耶。懷王二十一年、秦遂拔郢、而楚徙陳。不知在此後幾年也）」と注する（注51）。これに対し綱齋は、

秦から楚を攻めに行つて、陳と云ふ所へ徙つたぞ。案の如く屈原の云はれたやうになつたぞ。去りては忠臣明哲の言は、能く合ふことぞ。朱子も極めて此時の天子の、韓侂胄に惑うて居らるゝ故、斯う仰せられた

ぞ。（『楚辭師說』「九章」「哀郢」（注52））

と述べ、朱注に込められた朱熹の含意を明らかにしようとする。

さらに、「遠遊」の「惟だ天地の窮まり無く、人生の長く勤むるを哀しむ。往者余及ばず、來者吾聞かず。（惟天地之無窮兮、哀人生之長勤。往者余弗及兮、來者吾不聞。）」（九・一二句）について、朱熹はこう解説する。

『過去は手が届かず』これは如何ともするなきも、『未來は聞き及ばず』については、正道を行く者が非運、非道の者が幸運という、こんな理不尽に対する天の審判を見届けられぬのが果てなき悲しみ。これこそ屈原が神仙に不死を願つたゆえん。ああ遠いことよ、俗人と話すのは実に難しい（往者之不可及、則已末如之何矣。獨來者之不得聞、則夫世之惠迪而未吉、從逆而未凶者、吾皆不得以須其反覆熟爛而睹夫天定勝人之所極、是則安能使人不爲沒世無涯之悲恨。此屈子所以願少須臾無死、而僥倖萬一於神仙度世之不可期也。嗚呼遠矣、是豈易與俗人言哉）」と（注53）。この末尾の「嗚呼遠きかな、是れ豈に俗人と言ひ易からんや」は、前掲の朱熹『集注』序の結語「嗚呼悽^{かな}しいかな。是れ豈に俗人と言ひ易からんや（嗚呼悽矣、是豈易與俗人言哉）」と重なる表現である。それ故か、綱齋の注はここでも朱熹に言及する。

「俗人は屈原が仙術に惑うて長生を願つたというが」屈原の思ひ入れは左様でない。長生して、世の成れの果が見たいとあること、此ことが云ふに云はれぬとあることぞ。朱子などの韓侂胄に厄せられて、申し上げられた旨が解けなんだが、案の如く宋の果て口が、一字一點朱子の云はれた旨に判を捺したやうに違はなんだぞ。（『楚辭師說』「遠遊」（注54））

このように、『楚辭』解釈のためには不必要と思える朱熹への殊更な言及

に、屈原と二重写しになった朱熹の心情をも解明しようとする綱齋『楚辞師説』の特徴が指摘できよう。

結 論

本稿では、浅見綱齋『楚辞師説』の特徴二点を指摘した。第一に、綱齋の名著『靖献遺言』および綱齋の学問観（格物説）との関連である。綱齋の学問観の特色は『大学』の「格物」説にある。綱齋は、道理の追究は「物」すなわち具体的な事物に即して考究し、体認した道理を有りのまま素直に発現すべきとして、学者の主体性・主観性を強調した。『靖献遺言』は、朱熹『小学』稽古篇「君臣之義」の構成・表現を継承し、忠臣の事績・遺言という具体的「物」に即して身を以て君臣倫理を体認する「格物」による学びの書であった。また『遺言』の屈原観もまた朱熹『楚辞集注』のそれを継承するものであった。そして朱熹『集注』の講義に基づく綱齋『師説』もまた、「格物」によつて忠心を学ぶ書として『靖献遺言』の延長線上にあり、かつ朱熹『集注』および綱齋『遺言』の屈原観を継承し、さらにそれを詳述し宣揚する『楚辞』注釈であった。

第二に、屈原と朱熹との二重写しとなった心情の解明である。朱熹は『楚辞』を屈原の「忠君愛国の誠心」「縉倦惻怛、自から已む能はざるの至意」から生まれた作品と捉え、讒言により追放されても君主を思い続けた忠臣という屈原観を明示した。かつ、そこに慶元の党禁で弾圧され朝廷を追われながらも主君を思慕し続けた朱熹自身の不遇と鬱屈した心情とを重ね合わせた。綱齋は『師説』において、朱熹『集注』によつて屈原の心情を明らかにするとともに、『集注』執筆当時の朱熹の苦衷をも理解し共感を寄せ、その心情を解明しようとした。

以上、綱齋『楚辞師説』の特徴を指摘した。これは綱齋の『楚辞』解釈の基礎研究に当たる。これを基盤として、『楚辞師説』から読み取れる綱齋の臣下観の特徴を明らかにし、さらにそれと綱齋が生きた江戸中期の武家社会における君臣倫理との関係について考察を進める。

注

(1) 子安宣邦監修『日本思想史辞典』「佐藤直方」の項（ぺりかん社、二〇〇一年）二一頁、参照。

(2) 早川雅子「浅見綱齋の『大学』解釈に関する一考察―思弁的理から情誼的理へ―」（『倫理学』第五号、一九八七年）に「佐藤直方の関心が朱子学の原理の普遍化にあったのとは対照的に、日常生活における義理の実践に尽力した。」（二〇一頁）と指摘する。

(3) 闇齋は、韓愈「拘幽操」の原文に程朱の言葉と自跋を付し表章書として刊行した。「拘幽操」は、殷の紂王により幽囚されながらそれを全く怨まず、ひたすらに紂王を思う文王の惻怛の心情を、韓愈が推し量つて詠じた作品である。この闇齋の表章書「拘幽操」を基に、綱齋は程朱および諸儒の説を集録して師闇齋の意図を敷衍した「拘幽操附録」を著わした。また綱齋は何度も「拘幽操」を講義し、高弟・若林強齋がそれを筆録した「拘幽操師説」が数種現存する。闇齋・綱齋・強齋は君主に対する絶対的な忠義を説いて放伐を認めなかった。これに対し、直方・尚齋は放伐を容認し、崎門派内でも大義名分観が異なる。「拘幽操」をめぐる崎門派内の思想的立場の違いについて、田宮昌子「浅見綱齋講『楚辞師説』研究序説―崎門派の学と思―」（『宮崎公立大学人文学部紀要』第二十八巻第一号、二〇二一年）四二

―四九頁が整理している。

- (4) 阿部隆一「崎門学派諸家の略伝と学風」(『山崎闇斎学派』岩波書店(日本思想大系31)、一九八〇年)五八五―五八六頁。

- (5) 近藤啓吾『浅見綱齋の研究』(神道史学会、一九七〇年)第二章第三節「靖献遺言」は、綱齋が師の常言「学問ハ名分カタ、ネバ、君臣ノ大義ヲ失フ」の精神を世に知らしめんが為に『靖献遺言』を編纂したと語り、「コノ書(引用者注…『靖献遺言』)ヲヨク見ヨ。聖人ノ大道、嘉右衛門殿(引用者注…闇斎)ノ心、コノ書ニアリ」と断言したとのべ、また『靖献遺言』が、その内容・分量から、綱齋の名著であることは言うまでもない、と評価する(二九―三〇頁)。

- (6) 竹治貞夫『楚辞研究』(風間書房、一九七八年)は、「江戸時代における楚辞の注釈的研究は乏しく、僅かに亀井昭陽の楚辞決が写本のまま行われたのに過ぎない。」(三七―一頁)という。なお、竹治は、邦儒の楚辞研究において綱齋『楚辞師説』に言及しない。いっぽう石本道明「浅見綱齋『楚辞師説』小考」(『國學院雜誌』第一一六卷・第十二号、二〇一五年)は「江戸時代に於ける本邦の楚辞研究は、前代に比して長足の進歩を遂げたと言えよう。朱子学の普及と相俟って、邦人の註釈が著わされ、その数は管見の限り十数種に及ぶ」(一頁)という。

- (7) 『楚辞師説』に関する専論に、注6前掲石本論考がある。石本論考は「五、綱齋註釈の特徴」で、A文学の始原と変容、B「切ない」情の重視と朱熹との相違、C日本の事例の並挙、D惻怛の心と忠、の四つの特徴を挙げる。以下に各要旨を記す。A綱齋は、詩に内在すべき情を非常に重視する。また、盛唐の律詩によって形式化し、明代の義理によって損なわれたという史の変容を認識していた。B朱熹は詩を人間性の根源に発する情の発露とするが、あるべき形は「性情之正」に発する詩であるとする。いっぽう綱齋が詩で歌うものとする「情」とは、「性」との関係で説明されるのではなく、あくまで自然の本心の状態である「切ない」と理解される。C『師説』には日本の事例を挙げて注釈を補助する部分がある。そこには、詩

に史の変容があったように、和歌にも真情から技巧への変容があり、日中に共通する『詩経』『楚辞』や『万葉集』にある自然の真情を重視する綱齋の文学観が見て取れる。D前掲Bと関連して、「忠」は情と接続し、「心の離れぬ惻怛の本心」等と解説され、「忠」を主君にどこまでも添い遂げる「切ない心」とする綱齋の認識が見て取れる。綱齋の理解では、私的な「情」が公的關係であるべき「忠義」と重なりあう。『楚辞』はその「情」と「忠」が一体であることを知らしめる不可欠な「詩」として、綱齋に尊崇されたと考えられる。

- (8) 諸橋轍次・安岡正篤監修『朝鮮の朱子学・日本の朱子学(上)』(明徳出版社(朱子学大系 第十二卷)、一九七七年)二二六―二二七頁。

- (9) 注8前掲の諸橋・安岡監修書は、この箇所には次の注釈を付す。「単なる観念でもって人間のそうなくてはならない筋道を講述してみても、人々に与える感激は、具体的史実による感動の痛切なものには遠く及ばない。これは、史記の太史公自序の中に援かれた孔子の語に本づくもの。」二二七頁。

- (10) 倉本長治編『浅見綱齋集』(誠文堂新光社(近世社会経済學説大系7)、一九三七年)四〇八頁。『筍録』は綱齋の雑話を数名の門人に交代で筆録させた語録。原文は読点のみであるが、適宜に句点を用いた。

- (11) 以下の『小学』の構成・内容は宇野精一『小学』(明治書院(新釈漢文大系 第三卷)、一九六五年)「小学解題」を参照。『小学』本文の引用も同書に拠った。

- (12) 綱齋の『大学』解釈および「格物」観について、注2前掲早川論考は、綱齋において理は本質的には所与の規範であることは否めないが、理を自ずからそうあるべき事物の在り方の原理とし、さらに心と一体化することにより、義理は「為さねばならない規範」から「本来そうせざるにはいられないやむにやまれぬ情誼的規範」へと転化した、とする。さらに行為も、義理のままにやむにやまれず自ずから湧き出る心の動きのあらわれであり、それ自体が行為する主体の存在意義を問うものとされ、この義理の情誼的規範化という思考様式に、日本独自の思考様式の一

端が指摘できる、とする（一一一頁）。

- (13) 浅見綱斎『綱斎先生大学講義』（京都大学図書館蔵写本、天明元年（一七八二）六三葉表―六四葉表。原文に句点や「」などの記号は無いが適宜補った。また「や」などの合略仮名はそれぞれコトやシテなどに改めた。以下同じ。

- (14) 注13前掲『綱斎先生大学講義』七〇葉表。

- (15) 注13前掲『綱斎先生大学講義』六一葉表―六一葉裏。

- (16) 注13前掲『綱斎先生大学講義』五九葉裏―六〇葉表。

- (17) 綱斎の屈原観・臣下観について、別稿「浅見綱斎『楚辞師説』の臣下観」を準備し公表を予定している。

- (18) 浅見綱斎『楚辞師説』（『楚辞』、早稲田大学出版部〈先哲遺著漢籍国字解全書第一七巻〉、一九一一年）「楚辞集註總釋」、二二三頁。この漢籍国字解全書は国分青厓所蔵の写本に基づくが（同書「解題附著者小伝」三頁）、福井県小浜市立図書館の酒井文庫に同系統の写本（以下「小浜酒井本」と称す）が所蔵される。小浜酒井本の奥書に、「〔『師説』下巻末尾の本奥書〕綱斎先生講此篇也始于元禄十四年辛巳十月廿八日而終于明年壬午十月廿三日」、「〔『師説』下巻裏表紙の書写奥書〕楚辭同後語、綱齋先生所講說而強齋先生手錄之。今請望楠所藏之原本繕寫焉」とある。「望楠」は綱斎高弟の若林強齋の書齋名で、小浜酒井本は強齋が手写した原本に基づく由緒の明らかな写本である。この二種の写本の間には若干の差異が認められる。本稿の『師説』の引用は、基本的には漢籍国字解全書本に拠り、原文には無い句点や鉤括弧などの記号を適宜補い、文意の補足は「」で括り、引用者の語釈は（ ）で括って表示した。なお、漢籍国字解全書本と小浜酒井本との間の差異については、次の凡例に拠り注記した。もっとも煩を避けるため微細な差異は注記しないこともある。

・小浜酒井本は原本に基づき漢字カタカナで表示する。

・両者の字句の差異については、漢籍国字解全書本の差異の存する箇所傍線を付

し、それに続けて小浜酒井本の字句を（ ）で括り傍線を付して表示する。

・漢籍国字解全書本に無く、小浜酒井本にのみ有る箇所については、該当箇所に小浜酒井本の字句を（ ）で括って表示する。

・漢籍国字解全書本にのみ有り、小浜酒井本に無い箇所については、その箇所を「」で括って表示する

- (19) 注18前掲『楚辞師説』「九歌」「湘君」二九―三三句注、八二―八三頁。なお「九歌」「東皇太一」九―一四句注、七八頁にも「此情を詞遣ひで知るが宜い。君臣の至親至切の忠義の心を赤裸にして見ようならば、楚辞ぞ」と見える。

- (20) 注18前掲『楚辞師説』一頁。

- (21) 注18前掲『楚辞師説』朱熹「楚辞集注序」に対する綱斎注、六頁。

- (22) 近藤啓吾『若林強齋の研究』（神道史学会、一九七九年）第二章一―四「若林強齋の『楚辞』講説」一四四―一四五頁。

- (23) 注22前掲近藤論考、「強齋の『楚辞』尊重が、その『靖獻遺言』への沈潜の結果として、その精神を更に明らかにすべく出で来つたものであることを推量せしめる」（一四五頁）という。

- (24) 本稿では「注釈」を広く捉え『楚辞師説』を『楚辞』の注釈とする。『楚辞師説』の専論である注6前掲石本論考も「〔本邦の楚辞注釈の中で〕註釈の範囲・内容ともに庄巻と言える著作が、浅見綱斎『楚辞師説』であろう」（一頁）とし、『楚辞師説』を注釈と見なす。

- (25) 矢田尚子『楚辞「離騷」を読む―悲劇の忠臣・屈原の人物像をめぐって―』（東北大出版会、二〇一八年）第二部第八章「王逸『楚辞章句』以前の屈原評価」三「司馬遷『史記』屈原賈生列伝」二二五頁。

- (26) 『史記』（中華書局、一九八二年）卷八十四「屈原賈生列伝」、二四八二頁。

- (27) 小南一郎『楚辞とその注釈者たち』（朋友書店、二〇〇三年）第五章「朱熹『楚辞集注』の編纂」第五節「怨みの文学」四一一頁。

(28) 大木康『不平の中国文学史』(筑摩書房、一九九六年)第五章「不平の文学史―韓愈まで」は、先の『史記』屈原伝の引用箇所に関して、「司馬遷は屈原を取り上げることによって、己を語ろうとしているように見える。また後世の読者にとって、才能があつて順調にやつて来たものが、上にいるものの無理解あるいは同輩の妨害によって、才能の發揮が妨げられるという点に、自己同化を行うことが可能なのである」(一九二頁)と述べ、司馬遷の屈原観が後世の読者に受容される要素を示唆する。

(29) 注27前掲小南論考、四一―頁。

(30) 『楚辭集注』序の本文は『楚辭集注』(藝文印書館、一九六七年、三頁)に拠る。なお部分的な現代日本語訳が注27前掲小南論考三九七―三九八頁に見える。

(31) 注18前掲『楚辭師説』「楚辭集註総釈」、二二三頁。

(32) 注18前掲『楚辭師説』「集注目錄並序」「縫倦惻怛」注、六頁。

(33) 注18前掲『楚辭師説』「離騷」乱辞三七二―三七六句注、七一七―七二頁

(34) 注18前掲『楚辭師説』「九歌」「湘君」三四―三八句注、八三八―八四頁。

(35) 注27前掲小南論考の第五章第五節に次のように指摘する。「朱熹が、このように心をこめて屈原の心情を説明するとき、それは、ほとんどそのまま彼自身の心にかたつていって良いであろう。自分に対して不公平な世のなりゆきを、生き延びて、その結末まで見たいと願つたのは朱熹自身であり、あるいは「集注」の序文に見えるように、その志は当時の世に誤解され、後世にも理解されず、千載の後にもそれを明らかにしてくれる者 wait っているのは、屈原でもあると同時に朱熹自身でもあつた。俗人たちには理解されぬ自らの志を、千載の後の知己に明らかにしてもらふための媒介として「楚辭集注」を編んだのだと、その序文に二重の意味を重ねて読むことが可能なのである。」四一―七頁。

(36) 朱熹の事跡については、王懋竑撰・何忠礼点校『朱熹年譜』(中華書局〈年譜叢

刊〉、一九九八年)、三浦國雄『朱子伝』(平凡社〈平凡社ライブラリー707〉、二〇一〇年、『人類の知的遺産19 朱子』(講談社、一九七九)第Ⅱ部「朱子の生涯」に修正・加筆)、衣川強『朱熹』(白帝社〈中国歴史人物選第七巻〉、一九九四年)を参照。

(37) 注30前掲『楚辭集注』五頁。

(38) 注27前掲小南論考参照。また注28前掲大木論考の第五章は、「司馬遷は屈原を取り上げることによって、己を語ろうとしているように見える。」(一九二頁)と述べる。これは朱熹の『楚辭』解釈にも当てはまる。朱熹は屈原の心意を明らかにすることで自身の思いをも語るのである。ただし、その思いを「怨み」とはしない。

(39) 注18前掲『楚辭師説』「楚辭集注目錄並序」「庶幾説者く俗人言哉」注、一〇頁。

(40) 『綱齋先生文集』(ぺりかん社〈近世儒家文集集成2〉、一九八七年)、六二頁。

(41) 注22前掲近藤論考、六五頁。

(42) 李滉輯注『朱子行状』の版本および崎門派での評価については、阿部吉雄『日本朱子学と朝鮮』(東京大学出版会、一九六五年)四三―四三三頁を参照。

(43) 黄榦撰・李滉輯注『朱子行状』一卷(寛永正保刊、国立国会図書館所蔵、同館デジタルコレクション)三九葉。原文には句読点はないが適宜補った。

(44) 『朱子行状師説』坤卷(慶應義塾大学図書館所蔵、HathiTrust Digital Library)七八頁。原文には句読点や段落は無いが適宜補い、漢字は繁体字に統一した。

(45) 注18前掲『楚辭師説』「楚辭集注目錄並序」二頁。

(46) 他に例えば、注18前掲『楚辭師説』「九歌」「湘君」三三・三四句「捐余玦兮江中、遺余佩兮醴浦」の朱熹注「愛慕之心、終不能忘」の綱齋注に「縫綰と君に結ばれて在る心の解けぬが、忠臣の心の至極ぞ、斯様な處を極めて、味はふ筈のことぞ。斯様な處を、朱子の發せられて、數千載埋れた屈原が心が明になりた」(八四頁)とある。

- (47) 注 30 前掲『楚辭集注』四九―五〇頁。
- (48) 注 18 前掲『楚辭師說』「離騷」三〇九・三二〇句注、六三頁。
- (49) 注 30 前掲『楚辭集注』一四六頁。
- (50) 注 18 前掲『楚辭師說』「九章」「惜誦」六九―七二句注、一六七頁。なお、注 43 前掲『朱子行狀』慶元二年李滉注に、朱熹を誹謗中傷すれば利益になるとして「奇貨」と呼んだことが見える。
- (51) 注 30 前掲『楚辭集注』一五六頁。
- (52) 注 18 前掲『楚辭師說』「九章」「哀郢」三七―四〇句注、一七九頁。
- (53) 注 30 前掲『楚辭集注』一九八―一九九頁。
- (54) 注 18 前掲『楚辭師說』「遠遊」九句―二句注、二三頁。

【附記】

本稿は日本学術振興会・科学研究費補助金基盤研究(C)「国際漢学における日本楚辞学的位置づけと意義」(研究代表者: 田宮昌子、課題番号 19K00377) による成果の一部である。

矢羽野 隆男(やはの・たかお)

一九六五年生まれ。四天王寺大学人文社会学部教授。専門は中国哲学、日本漢学。単著に『大学・中庸』(角川学芸出版〈角川ソフィア文庫〉、二〇一六年二月) 共著に『懷徳堂研究第二集』(竹田健二編著、汲古書院、二〇一八年十一月)、主要論文に「泊園書院の『大学』解釈―徂徠学の継承と展開と―」(『中国研究集刊』第五九号、二〇一四年十二月) など。

